

# アヂシキタカヒコネノカミはなぜ“大御神”なのか

秋田 巖

## I はじめに

おなじみの日本神話『古事記』において、大御神<sup>おほみかみ</sup>の尊称が付与されている神は二柱しかない。つまり、タイトルに挙げた阿遲志貴日子根神<sup>あぢしきたかひこねのかみ</sup>（阿治志貴日子根神・阿遲鉏高日子根神）と、あと一柱は、かの天照大御神である。アマテラスが大御神と呼ばれるのはもっともなことであるが、神話研究者を除いてはほとんど誰も知らないような神、アヂシキタカヒコネが大御神と呼ばれることは不思議なことであり、手元<sup>てもと</sup>の神話事典<sup>1)</sup>にも「記の系譜にアジスキタカヒコネはオホクニヌシと多紀理毗売の子、「迦毛の大御神」とされているが、鴨、宗像、三輪、土師氏との関係、記に三柱<sup>2)</sup>だけの大御神とされる理由、その発祥は大和なのか出雲なのか、神婚説話・七夕伝説・ホムチワケ説話とのかかわりなど、なお不明な点を多く残している」（傍点引用者）と記述がある。つまりアヂシキタカヒコネがなぜ“大御神”なのか理由がわからないのだ。といってこの事典は1997年出版のものであり、その後の研究の様子を調べ尽くさないといけないのだが、今のところ大御神とされる根拠が示された文献を見出しえていない。またそれ以前の研究についても渉獵が必要なのであるが、それも未完であり、まずは速報として発表させていただく。

## II おほみかみ おほかみ 大御神と大神

「大神」つまり「御」の字が抜けたオホカミなら他にもいるが、この「御」の字のある無し<sup>ありなし</sup>の差は大きいと思われる。

伊勢神宮では二十年に一度のご遷宮の際、古

神殿から新神殿へと「御霊移りの儀式」が執り行われるのであるが、その時、運ばれるモノが「御」と呼ばれる神体である。大御神の中核をなすモノが「御」であり、大御神と大神の差は大きい。

ところで、大神と呼ばれる神様たちはといえば、まず出雲の大神（大国主の神、大物主の大神）、そして意富美和の大神、墨江の大神、高木の大神（タカミムスヒの神）、道反の大神、黄泉津大神がましますのだが、ここではこれら「大神」がいることを指摘するにとどめ、「大御神」に戻ろう。

## III アヂシキタカヒコネノカミ

### 1. 喪屋での大暴れ

さて、この神様が古事記の記述の中のどこで登場するかといえば、天若日子のくだりである。

すなわち、アマテラスが「葦原の水穂の国は我が御子の正勝吾勝勝速日天の忍穂耳の命のお治め遊ばすべき国である」<sup>3)</sup>と仰せになったことからことが展開し始める。つまり、葦原の水穂の国もだいぶ良く出来上がったので、そろそろ、私の子・オシホミミに治めさせるのが良いだろう、といい始める。

そこで当のオシホミミを葦原の中つ国へやるのだが、オシホミミは中つ国の騒々しさに狼狽し逃げ帰ってしまう（視察しただけ）。それではと次にアメノホヒが遣わされるのだが、大国主に媚びへつらい、三年間復讐しなかった。そうしてつかわされたのが天津国玉神の子、アメワカヒコである。しかし、この神は大国主の娘の下照比売と結婚してしまい、8年経っても復讐をしない。そこで、アマテラスとタカミムス

ヒを中心に相談し、雉子名鳴女<sup>きじくなきめ</sup>を遣わすのであるが、あろうことかタカミスヒから下賜された呪具の弓矢でアメワカヒコはキジのナキメを射殺してしまう。

その矢はキジのナキメを貫通して天の安の河の河原にいたアマテラス・タカミスヒのところに達する。自分が与えた矢に血がついて手元にかえてきたことをいぶかしんだタカミスヒは「アメワカヒコが不屈きな心を持ってこの矢を使ったのであるならアメワカヒコに当たれ」と言って地上に投げ返す、と、アメワカヒコに命中し、絶命する。

かくして、アメワカヒコの葬儀が執り行われる。父である天津国玉神<sup>あまつくにたまのかみ</sup>は天から降りてきて、アメワカヒコの妻のシタテルヒメなどと共に泣き悲しんでいる。そこにシタテルヒメの兄のアデシキタカヒコネも弔問に訪れる。すると、周りが驚く。何しろ、アメワカヒコにそっくりなのだ。瓜二つ。あまりに似ているので、「アメワカヒコが生き返った」と勘違いしアマツニタマやシタテルヒメは大喜びする。「私の子は死ななかった」「私の夫は死ななかった」と手足に取りすがり泣き喜ぶ。するとアデシキタカヒコネは「穢れた死人と間違うとは何事だ!」と大いに怒り、剣を抜いては暴れ、喪屋を蹴飛ばしては暴れ、怒り狂ったまま飛び去ってしまう。妹シタテルヒメは夷振<sup>ひなぶり</sup>の歌でそれを見送る。

天なるや 弟棚機<sup>おとたなばた</sup>の  
うながせる 玉<sup>たま</sup>の御統、  
御統に あな玉はや。  
み谷<sup>たに</sup> 二わたらす  
阿遲志貴<sup>あぢしたかひ</sup>日子根<sup>ひね</sup>の神ぞ。

この歌にある〈み谷 二わたらす 阿遲志貴日子根の神〉とは、折口信夫によれば、この神が長大な蛇体の神であることを表すという<sup>4)</sup>。

物語は、そして大国主の国譲りへとつながっていく。

## 2. 出雲国風土記におけるアデシキタカヒコネノカミ

アデシキタカヒコネノカミはかくのごとく乱暴者であるのだが、この神の他の特徴を見てみよう。

ここまでは『古事記』を見てきたが、ここで『風土記』を参照する。『出雲国風土記』には、以下の記述がある。まず、「高岸<sup>たかきし</sup>の郷<sup>さと</sup>」の項。

郡家の東北二里。天の下所造らしし大神の御子、阿遲須枳高日子命、甚く昼夜哭き坐しき。仍りて、其処に高屋造りて坐せき。即ち高椅<sup>すなわ</sup>を建てて登り降らせて、養し奉りき。故、高屋と云ふ

(現代語訳「高岸の郷。郡役所の東北二里[1.1キロメートル]。天の下をお造りになった大神の御子、阿遲須枳高日子命が昼となく夜となく、ひどくお泣きになった。それで其処に高床の建物を造って、御子をお据えした。そして高い梯子をたてて登り降りさせて養育し申し上げた。だから、高屋<sup>たかきし</sup>という」)<sup>5)</sup>

とある。また、三津<sup>みつ</sup>の郷<sup>さと</sup>の項には

郡家の西南二十五里。大神大穴持命<sup>さとおおきみおほなもちのみこと</sup>の御子、阿遲須枳高日子命、御須髮八握<sup>みすけやつか</sup>に生ふるまで、昼夜哭き坐して、辞通はざりき。尔の時、御祖<sup>みおや</sup>の命、御子<sup>みこ</sup>を船に乘せて、八十島を率巡りて、宇良加志給<sup>うらかしたま</sup>へども、猶哭くこと止まずありき。大神、夢に願ぎ給ひしく、「御子の哭く由を告らせ」と夢に願ぎ坐ししかば、則夜<sup>すなわ</sup>の夢に御子辞通ふと見坐しき。則ち寤めて問ひ給へば、尔の時「御津<sup>みつ</sup>」と申したまひき。尔の時、「何処<sup>いづ</sup>を然云ふ」と問ひ給へば、即ち御祖<sup>みおや</sup>の御前<sup>みまへ</sup>を立ち去り出で坐して、石川<sup>いしかは</sup>を度り、坂の上に至り留り、「是処ぞ」と申したまひき。尔の時、其の津の水活れ出でて、御身沐浴<sup>ゆあま</sup>み坐しき。

(現代語訳「三津の郷。郡役所の西南

二十五里[13.4キロメートル]。大神大穴持命の御子、阿遲須積高日子命が、おひげが長くのびるほどになっても、まだ昼も夜も泣いておいでになるばかりで、ことばもしゃべれなかった。そのとき、御親の大神が、御子を船に乗せてたくさんの島々を連れてめぐって、心を楽しませようとなさったが、それでも泣きやまなかった。大神が夢でのお告げを祈願なさって、「御子が泣くわけをお教えてください」と夢見を祈願なさったところ、その夜の夢に、御子が口をきくようになったとご覧になった。そこで目覚めて御子に問いかけなされると、御子は「御津」と申された。そのとき大神が、「どこをそう言うのだね」とお尋ねになると、御子はただちに御親の前から立ち去って出て行かれ、石川を渡り、坂の上まで行ってとどまり、「ここです」と申された。そのとき、その津の水が湧き出て、その水を浴びてお身体を净めなさった」)<sup>6)</sup>

とある。

高岸の郷の話では、アヂシキタカヒコネが昼となく夜となくひどく泣くので、高い梯下を立てて登り降りさせた。三津の郷の話では、ひげが長くのびるほどになっても泣き続け、言葉を発せない。そこで船に乗せて八十島巡りをした。が泣きやまないで夢を通じて御津の水で体を清めた一。

#### (i) 高い梯子の登り降り

ここで本論とは直接の関係はないのだが、この重要なイメージについて少し触れておく。泣きやまないアヂシキタカヒコネの「魂鎮め」として高い梯子を登り降りさせる。この行為はギリシア神話のシーシュポスを連想させる。

ゼウスの怒りに触れ地獄に落とされたシーシュポスは、大きな岩を山の頂まで転がして運びあげる罰を与えられる。ところがせっかく山頂まで運んでもその巨岩はまた下まで転がり落ちる。ゆえに、シーシュポスは永遠に巨岩の運び上げを繰り返さなければならない。カミュはシーシュポスのこの行為にこそ人生の意味と幸福さ

を見出したのであるが、「難儀な労働の繰り返し」には「魂鎮め」の力もまた内包されている。

そして、高所と低所を行き来する行為は意識の幅を拡大させることもする。

シーシュポスは罰としてこの業体を担わされているのだが、では、アヂシキタカヒコネノカミは何故にこのような「魂鎮め」を為さねばならなかったのか。

#### (ii) 泣き叫び、かつ、喋れないということ

また御津の郷の話では、アヂシキタカヒコネは泣き叫ぶ“から”なのか、泣き叫び“かつ”なのか読み取りにくいのだが、とにかく、言葉が喋れない。こちらの話では八十島巡り（これも鎮魂め）でも効果なく、夢と水浴（浄め）が行われた。

“叫びかつ喋れない”。これはその苦しみのすさまじさを物語る。

『古事記』の「物言わぬ子」の話としてはホムチワケ説話がある。ホムチワケも長く物を言わなかった。それは何故か。垂仁天皇は後の沙本毗売に殺されかかった。危うく助かった垂仁天皇は后を焼き殺す。その直前に沙本毗売から生まれたのがホムチワケなのだ<sup>7)</sup>。

ここでは物言わぬ理由が語られている。

つらい目に遭うと人はそれについて語りたくなったり、またその逆だったりする。「つらい目」が極まっていけば、「語り」もすさまじくなる。あるいは、その逆つまり「沈黙」も厳しいものとなる。

ここでアヂシキタカヒコネがひげが長くのびてもまだ激しく泣き叫び、かつ、固く沈黙を守る。この理由はなにか。よほどのことがアヂシキの身と心と魂に生じている。

## IV スサノヲ

大暴れをする神、ひげが長くのびてもまだ泣き叫ぶ神、とくれば想起されるのはスサノヲであろう。

アヂシキタカヒコネとスサノヲ、この二柱は似ている。

この小論では詳述は避けるが、松前健は、アメワカヒコが死にアヂシキタカヒコネとして復活したとし、山上伊豆母は両神はもともと同一神であったとする。同様のことが中西進、西郷信綱、吉井巖等々多数の研究者によって論ぜられている。両者を同一神とする（アメワカヒコが死にアヂシキタカヒコネとして復活する説もひっくるめて）見方は成立しうる。

さて、ここに服部中庸という江戸時代の学者がいる。服部はツクヨミ・スサノヲ同一神説を提出している。この説に関しても詳しい紹介はしないが、ツクヨミは食物神ウケモチを殺し（日本書紀）、スサノヲもまた食物神オホゲツヒメを殺している（古事記）。

アメワカヒコがタカミムスヒの矢によって殺されアヂシキタカヒコネノカミとして復活した如く、アヂシキタカヒコネノカミと似すぎているスサノヲにも同様のことがあったのではないか。

アヂシキタカヒコネがひげが長くのびるまで泣き喚きあるいは言葉を発さなかったのは、ホムチワケ同様、とてもつらい「過去」を背負わされていたからだと考えることはできないか。

ホムチワケはその父と母が殺し合った。その業を担わされて生を受けた彼は言葉を発しなかった。アヂシキタカヒコネは“アメワカヒコの時に”矢で射殺された。その想いがアヂシキタカヒコネを泣かせ続けたのではないか。「殺された」ことが記憶には残ってなくても深層に宿る「記憶」が号泣させ続けたのではないか。故に「魂鎮め」が必要であった一。

同様、スサノヲ、生まれたときから泣き叫びひげが長くのびてもまだ泣き叫び、「母」を求め母の国へ行きたがったのも、余程のことをスサノヲが背負っていたと考えるほうがむしろ自然である。

そして、もし、アマテラスがツクヨミを「無

化」したのであれば、ツクヨミの変容たるスサノヲの高天原における乱暴狼藉をかなりの程度許したことも、あるいは許さざるを得なかったことも納得である。

『古事記』においてただ二柱だけの大御神、それがアマテラスとアヂシキタカヒコネである。しかし、この両者では格が違いすぎる。アマテラスと、もう一柱、大御神がいるとすれば、最も同格に近い神はスサノヲである。

アマテラスがツクヨミを「無化」し、ツクヨミはスサノヲとして復活した。としても、最高神の「この所業」が表立って語られていなくても不思議ではない。この秘儀が、アマテラスとつながりの深いタカミムスヒの矢に殺されたアメワカヒコ・その転生としてのアヂシキタカヒコネの項で少しだけわかりやすく語りなおされた、と考えることは不可能ではないであろう。

## V おわりに

『聖書』においてカインはアベルを殺害し、追放される。そして、アベルのかわりに与えられたものがセトである。

アマテラスがツクヨミを無化し、復活したものがスサノヲであるとするならば、『聖書』と『古事記』には重要な違いが二つある。まず、『聖書』においては殺害者であるカインはエデンの園から追放され、『古事記』において追放されたのはスサノヲの方である。二度までも（葦原の中つ国から、そして高天原から）。

もう一つの違いは、アベルの「変容」の姿であるセトはアベルに比べ存在が稀薄である（これは、十字架までのキリストに比して、「十字架後のキリスト」のイメージがあまりに稀薄すぎることに重なる）のに対し、ツクヨミが「変容」したスサノヲの存在感はすさまじい。この違いは日本において「破形<sup>はきよう</sup>の英雄」Disfigured Hero<sup>8)</sup>を成り立たせるための重要な原型であるかもしれない。

## 引用文献・注

- 1) 大林太良・吉田敦彦監修『日本神話事典』大和書房、東京、p.20、1997年
- 2) 二柱と思われるが更なる考証が必要である。
- 3) 武田祐吉訳注 中村啓信補訂・解説『新訂古事記』角川日本古典文庫、東京、pp.240-241、1977年
- 4) 朝倉治彦、井之口章次、岡野弘彦、松前健『神話伝説辞典』東京堂出版、東京、p.33、1963年；このこともアメワカヒコそしてスサノヲとの関係を考える上で重要な点であるが「蛇」でつながっていることを指摘しておくにとどめ、次の機会に詳述する。
- 5) 萩原千鶴訳注『出雲国風土記』講談社学術文庫、東京、p.225, 227、1999年
- 6) 萩原千鶴訳注『出雲国風土記』講談社学術文庫、東京、p.268, 269、1999年
- 7) ホムチワケは成人に達しても物言わぬゆえ、太占<sup>みとまに</sup>をしてみると、出雲大神の祟りであることがわかり、彼の地へ。その帰り途、ホムチワケはヒナガヒメと一夜婚<sup>ひとよこん</sup>し、その正体が蛇であることを見て逃げる。後、「鶴<sup>くろ</sup>」（白鳥）を見て、物を言い始める、と物語りは続いていく。
- 8) 秋田 巖「心理療法と人間 —Disfigured Hero 試論—」『講座 心理療法 第6巻』岩波書店、東京、PP.111-153、2001年